
『Christmas Shuffle』

三沢 馬太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『Christmas Shuffle』

【Nコード】

N8034Q

【作者名】

三沢 馬太郎

【あらすじ】

クリスマス迫る大学に何かが起こる！

「…で、あるからして、ガイド・レーニの『ゴリアトの首を持つダビデ』には、苦難にあえぐユダヤ人たちの誇りが表現されており、あの驕慢とも取れる、気だるい陶酔に浸った視線…あれこそが、ユダヤ教、ひいてはキリスト教の勝利を端的に表現しているのではないかと思われるのでありまして…」

杉の木が、寒そうに佇んでいた。昼過ぎというのに窓の外の鉛色の雲は重く立ちこめ、キャンパスの柵の外に広がる街並みは、静謐な構内とは対照的に、年末の慌しい商業活動の活況を、赤や緑色の看板や広告物によって伝えていた。

「…で、当時のユダヤ人の歴史に共感したガイド・レーニも、若きダビデに自分たちの希望に満ちた未来を託し、重ね合わせているのではないかと思われる訳で…」

でっぴり太った男子学生は目を血走らせて喋り続けている。先ほどから時計を見たり、欠伸をしたり、隣の奴と小突き合ってクスクス笑っているゼミ生たちにはお構いなく、延々十分は続く長口舌にのめり込み、我を忘れていた。

「…よって、この作品は、敬虔なキリスト教美術の最重要作として位置付けられると…」

担当教授の水西も、レジュメに目を落とすふりをして、いつの間にか船を漕いでいた。

「ちよつと待つてください。大佛さん」

女子学生の元気な声が上がった。皆が顔を上げ、水西もよだれを垂らした顔をキョロキョロさせた。

一瞬ポカンとした大佛と呼ばれる男子学生は、腕を組んで言った。

「…な、なんだよ。また松田さんの反論かよう。上等だ。聞いてやる」

彼女は立ち上がり、言った。

「…いいですか？ 大佛さん。彼はカラバツチオらと同じく、耽美派に属します。あなたはグイド・レーニの他の作品『サン・セバスチアンの殉教』を知ってますか？」

大佛が知っている、と言うと、

「…あの作品でのサン・セバスチアンの表情を見て？」

「う、美しいじゃないか…まさに神へと召される忠実な信者の、純粹な神への眼差しが…」

「“純粹な神への眼差し”…？ まあ、呆れた。どうして受難に喘ぐ人が、あのように平然と、恍惚とした表情でいられるのです。矢の傷なんてほんの小さく書かれてるだけで、殆ど強調されていない。あのような作品を描く人が、神への愛や民族の勝利などを心から願う敬虔な信者だと言えますか？ いや、失礼。信者ということは百歩譲って認めるにしても、彼の作品には、神への愛を凌ぐ、密かな欲望が見え隠れします。いや、既に露見しています」

「それは…なに？」ニヤニヤした担当教授の水西が、ペンを片手に身を乗り出した。

「ホモ・セクシャリティーです。彼の作品には、おしなべてその傾向があります。よって『ゴリアトの首を持つダビデ』も、神への愛を騙って、ホモ・セクシャルの変態的性向を満たした作品に過ぎないのではないですか？」

「いや、いや、客観的に見てだなあ…！」大佛は真つ赤な顔をして叫ぶ。

「おい、“客観的”って言葉なんて、そう気安く使うんじゃないよ。お前、“神”にでもなった積もりか？」耳にピアスをした木村浩一が、ふてふてしく笑っている。「そうでしょ？ 先生？」水西を向く。

「う…うむ。まあ…そうだな…」大佛を気遣わしげに横目で見て、水西は言う。

「何を言う、木村！」大佛は水西にすぐるような目を向けた。「先生！ ぼくはあくまで冷静に、自分中心のものの見方にならずに見

て来た結果を述べてるんです。ダビデのあの目、あれは間違いなくユダヤ民族の誇りと自負を……」

大佛の弁明は続いたが、周囲の学生たちも、普段からの大佛の変態的側面を見聞きしているだけに、失笑を堪えるのに必死である。

松田真奈美は続ける。

「何故彼の作品が、三島由紀夫の自決の対象となり得たか？ 彼らの作品群は、明らかに近世ヨーロッパのホモ・セクシャルたちの格好の嗜好的となり、彼らを悦ばせていたのです。ダビデの、あの顕わな肌！ あの眼つき。『自負と誇り』ですって？ よくもまあ、そんなことが。あれは同性であるオスを挑発する、破廉恥な男娼の目です。そもそも今から三千年も前の砂漠の民だったダビデが、あんなヨーロッパ風の毛皮の衣服や羽付きの立派な帽子を被ってる訳がないじゃない」

「馬鹿。それくらいの脚色、美術に許されて当然だ。現実を現実のまま描いて、どうする」

「馬鹿とは何！」

「キーー！」

二人が掴みかからんばかりとなった時、チャイムが鳴った。

やれやれ……救いのゴングだ。

「さ、もう終わりにしよう」水西は呆れて、立ち上がる。「これで今年最後の授業となります。皆さん、お疲れさまでした。良いクリスマスを」

暇を持て余していたゼミ生達も、急に生き返ったように教室から飛び出して行く。

ブラブラと冷えた廊下を歩き、水西は太い首を回し、贅肉のついた肩を、自分で揉む。

「やれやれ、毎年のことながら、どうして文学部に来る学生ってのは、こうも扱いづらいのかな……」

ふと激情入り乱れる視線にゾツとし、水西は振り向いた。

踊り場の陰から、大佛がじっとこちらを見ていた。彼は身震いした。

「センス、あいつ、気を付けた方がいいですよ。手前勝手に逆恨みをした人間に、ママシのように喰らいつきノイローゼにして取り殺す、って評判つすから」後ろから来た木村が、くわえ煙草でニヤニヤ近付いてきた。

「ああ……。確か、ストーカー騒ぎも起こしてたと聞いたが」水西も歩き出し、肩越しに大佛を見た。

「あいつ……今は松田さんを狙ってるらしいですよ。今夜もデートに誘ったけど、もちろん駄目だった、と。恨みも相当、溜まってんじやないすか……ウヒヒ」携帯が鳴ったので、彼はその相手と暫く話す甘ったるい女の声が、水西にも聞こえた。「それじゃ、野暮用なんぞ」木村は去って行った。

水西も肩越しに大佛を見やりながら、そそくさと階段を上がり、研究室へと向かう。

水西の勤める大学のキャンパスは、街中にあるため決して広くはない。

北にある大通りに面した正門から構内へ入ると、中央広場へメイン・ストリートが南へ延び、広場の中央には大きな杉の木が立つ。学生たちはここをサークル等の待ち合わせの場所にしている。

中央広場を囲むように、東、西、南と三方に建物が置かれる。東に図書館と学食がある大学本部があり、西には経済学部と理学部棟が、南には文学部と法学部の棟が並ぶ。

文学部棟の最上階にある、水西の「西洋美術史・第2研究室」は中央広場に面し、そこからは、広場の杉の周りに、学生たちが集まる様が見て取れた。相変わらずの曇り空である。

水西は十畳ほどある研究室の明かりを点ける。白い漆喰の壁と、年季の入った、真っ黒な木の床が目飛び込む。入り口から入って部屋の東西には本棚が天井高く並び、梯子も掛けてある。中央には

簡単な木のテーブルがあり、正面に、窓外の広場に向かい合わせになる形で机が置いてある。

水西はスチームの栓を捻り、テーブル上のラジオを点ける。いつも、好きな洋楽をかけるFM局しか聴かない。同時に、窓際に据えたパソコンのスイッチも入れる。

「明日が紀要の今年度最後の号の締切りだ。早く、原稿を…」

ラジオから、女パーソナリティーの低いが浮わついた声が流れ出し、部屋を熱く埋めた。

「こんにちは。エステル沙織のお送りする、『acros this afternoon』のお時間です。相変わらず、寒あゝむうゝいい！　ところで…」パーソナリティーは言葉を区切った。

「…とゝうとゝ、やって来てしまいい、ま・し・た！　“この”『季節』、が！　アハア？　分かりますよね。もう、皆さん…。家ではもうソワソワと、今夜のイヴェントの準備に余念がない人が多いんじゃないかしらあ？　そおゝお、クリスマス、クリスマスが、やって来たのです！　ここ、六本木のスタジオから見渡すイヴのお昼の街の景色も、曇りがちだけど、違ったものに見えて来ちゃうみたい。とっても綺麗で。今日も、来るときいつものように、ブラブラ散歩しながら、渋谷と青山が通り道だったんで、人の顔を見ながら通つて来たんだけど、街を歩く人たちも、何となくウキウキしちゃって見えて、恋人たちなんかを見てると、『ううゝ、コノこの！　妬けるよ、この憎いね』なんてひがみの一つも言いたくなっちゃいますよねゝゝ。そんなところで…」

マライア・キャリーのクリスマス・ソングが流れ、水西は集中できずに顔を上げた。

日頃から、水西は感覚的で薄っぺらい、特にこの女性パーソナリティーのうわつき加減に辟易していた。遂には不満が声になる。

「何が『違ったものに見えて来ちゃう』？　『渋谷と青山が通り道』？　『人の顔を見ながら』？　手前が幸せだから、そんな精神的な余裕ブツこけるんだよ。『ワタシも幸せ、アナタも幸せ、皆いゝん

な幸せ。ああ、世界は平和で良かったネ』：馬鹿言え！ 究極のナルシズムだ。聴いてて反吐が出る」

しかし、曲がビーチ・ボーイズの「Little Saint Nick」へと変わったので、彼は辛うじてラジオを消さずに、キーボードを叩き続ける。

「そう、興奮するなつて」ノックの音がしたので、廊下への扉を振り返ると、東洋思想史の教授、河合清彦が立っていた。痩せて長身、クマヒゲを生やしている様はストイックな学究の徒を思わせるところがあり、肌の色艶良い大黒様のような水西とは対照的ですらある。学生時代からの知り合いであつたが、互いに性格が合わず、いつも反目し合っていた。「あんた、いつもそう言つてるけど、美術の研究なんて、それこそ感覚的で、ナルシズムの塊じゃないか。自分のやつてること棚に上げて、よく言つよ」

「う、うるさい！ おれが言いたいのは、在り来たりだが、クリスマスつてのは本来、もっと静かに、厳かに迎えるもんだ、つてことだけだ」

「そ、そ、そうですかねえ！？」眼鏡をずり上げながら、大学院生であり、河合の助手でもある杉山かなえが河合の後ろからオドオドと、真つ白な顔を出した。「わ、わ、わたしは結局、き、き、キリスト教の存在じたい、巧みに人をたぶらかす、け、軽薄な宗教だと……」

「そうぞ。全く、イメージ戦略の上手い、フランチャイズの一種だ。古代ローマ帝国からゲルマン民族、近世中国や日本にまで、実に上手く宣伝を行い、人々を洗脳して回つたもんだよ。マクドナルドやコカ・コーラと一緒にさ」そう言うと、河合は杉山と一緒に高らかに笑つた。

「う、うるさい！」水西は机を叩き、立ち上がった。「仏教はどうなんだ？ イスラム教は？ 結局、土着信仰を覆い尽くし、思想的にその地を蹂躪したという意味では、やつてること是一緒なんだよ」

「ム。じゅ、蹂躪だと……」河合の表情が曇つた。

「そもそもな、クリスマスってのは、こんなガラガラして派手なものじゃない。ベツレヘムの厩で生まれたキリストの聖性を、静かに祝福するだけで充分なんだ。ま、お祝いごと自体は、人を楽しい気分にするものだから、悪いものではないのだが…」

「お、お、オホオホ！ ま、マア。水西センセが、開き直りましてよ。オホオホ、おかしいの。ねえ、河合センセ？」杉山は河合に手を掛けた。

「うるせえ！」河合は、杉山の手を振り払う。そして、水西を指差した。「神聖なる仏陀の教えを見下しやがって。じゃ、聞くが儒教や道教はどうなんだ？ あれは東アジアの気候や生活風土に合ったからこそ、あそこまで自然に根付いたんじゃない？」そこまで言って、水西が聞いていないことに気付いた。「て、手前…」

「忙しいんでな。また後で」そう言っていると水西は窓際に向かい、キーボードを叩きはじめた。

「手前だって悔しい癖に、どうしていつも対決しない…！？」河合が拳を握った瞬間、

「きよ、キヨ、キヨホホホ！」杉山がけたたましく笑い出した。「あた、あたしに話し掛ける声が！ ラジオで喋る女の後ろから、悪魔の、邪教の手先の悪魔の囁きが聞こえる！ 何？ わたしと河合センセの仲を引き裂く？ そ、そうはさせないわよ」ラジオを持ち上げ、頭上に掲げた。「悪魔を、破壊する」

「わ、こら！ 何するんだ」杉山の手を掴もうとする水西の脳天に、ラジオが振り下ろされた。鈍い音がし、水西はギャツと叫び、その場にうずくまった。

「キヨ、キヨ、キヨ！ 悪魔が飛び出て来たわ。ホラ、そっちのパソコンに入った…」

「バ、馬鹿。杉山くん、またやつちまったじゃないか。バカ」河合はそう言つと、謝りもせず杉山を抱え、慌てて研究室から出て行った。

「あたた…」ノロノロと立ち上がり、頭を押さえた水西は、再びパソコンに向かった。「河合の助手の、あの気違いめが…あつ、フリーズしやがった!」

彼は飛び上がった。画面が動かない。「畜生、畜生…あの電波系女め…」画面をガンガン叩いていると、松田真奈美が入って来た。

「先生、どうしたんです!？」

水西が、面倒臭そうに経緯を説明すると、真奈美は目を潤ませた。「まあ、酷い…。可哀相なセンス…」急に立ち上がると、「杉山さんに、制裁を加えて来ますっ」鼻息荒く出て行くこととする。

「ま、待て!」

真奈美を止めようと慌てた水西は、椅子に足を引っ掛け、転倒した。

「わ」

「きや」

一瞬の後、水西は、振り向いた真奈美の両腕の中にいた。しゃがんだまま向き合った二人の顔は、互いに熱い息づかいの感じられる距離にある。

「センス…」真奈美が口を開く。「どうして、先生のことが好きな人がいるのに、それに気付かない振りをするの?」

「よしてくれ…」水西は顔を背けた。

涙目で彼を見つめ、下唇を噛んだままの真奈美。

「わたしは…いや、“おれ”は…」水西は声を絞り出した。「妻と別れてからというもの…」

「美術品しか愛せないカラダになっちゃったとでも…!？」真奈美が後を継いだ。

暫くの沈黙が流れた。

真奈美は目を見開き、可愛い唇をわななかせた。

「ホントなの? じゃあ、先生がダ・ヴィンチのピエタで快樂を得ていることも…?」

水西は、ゆっくりと頷いた。

真奈美は突然、立ち上がった。

「噂はホントだったのネ、先生!？」水西の肩を揺すった。「駄目よ、センセ! 本当の愛を知らなくちゃ、駄目!」

水西は悔しそうに唇を噛んだままである。

真奈美は後ずさり、よろめいた。「ああ…神さま…」

「おれは…誓ったのだ…その『神さま』への愛を」搾り出すような水西の声。

「うわあ〜ん!」真奈美は突如号泣し、部屋から駈けて出てゆく。

「センセイの、先生の…、ヘンタイ!」

ラジオから、ブライアン・セツツァーの歌が流れている。

暫く放心状態だった水西は、立ち上がると埃にまみれたズボンをはいた。

「やれやれ…とんだクリスマスだ」頭を振り、水西はパソコンに向かう。

「おい、お前」

声がしたのは、水西が椅子に座って暫く経った時だった。

水西は振り返り、ドアの付近を見た。一瞬、大佛かとも思ったが、誰もいない。

「疲れてるのかな…?」首を傾げ、キーボードに向かう。

「おい、シカトすんな、コラ」

今度は明らかな声が耳に入る。

「だ、誰だ!」水西は目を見開いて振り返った。

「おれだよ、俺。いや、“お前”か」

上を見れば、本棚の梯子に腰掛ける男がいる。風貌は、水西そっくりである。いや、もう一人の水西が、そこに掛けていた。

「わ、うわっ! だ、誰?」水西は腰を抜かしかけた。

「お前の“一部”だ」もう一人の水西は梯子から飛び降り、水西に歩み寄る。「正確には、お前の『破壊衝動』と言った方が良いかな」
「は、『破壊衝動』だと!？」

「そう…」水西の分身すなわち“破壊衝動”は梯子から飛び降りた。「お前のココロの中に潜む、攻撃的な人格さ」よく見れば水西本人のふてぶてしさを強調したような、生意気な面構えをしている。

「お前はいつも、神への愛だのストイシズムだのとゴタクを並べては人と人との緊張関係から逃れ、たとえそれに悩み、傷付いても己れのストレスを人に向けることなく圧殺してきた」「破壊衝動”は水西本人より数倍凶悪な目を、更に吊り上げた。「人に、自分の感情をさらけ出すのが恐いんだろ？」

「何を言ってる！？」水西は目元を引き攣らせて笑う。「フ…フフン。分かったふうな口利くな。そもそもお前、どこから来た？ 精神病院から逃げて来た、おれのソックリさんか？」

「ハア…ッ」「破壊衝動”は両肩を大げさにすぼめた。「手前の顔くらい、よく覚えとけ。この顔は、間違いなく手前の顔だろ？ おれは、お前の一部なんだってば」

「信じられるか！」確かに自分とソックリであると意識の底で驚愕しつつ、水西は言った。

「だっちゅーとんネン！」“破壊衝動”が水西の襟首を掴んだ。こめかみに神経質な青筋が浮き上がっている。

「じゃ、じゃあ訊くけど…お前、どこから出て来たんだよう…？」水西も足を震わせて言った。力と反抗心が出ない。

「あっちだ」そう言うと、空いた手で、“破壊衝動”はパソコンを指差した。「おれは、元々貴様の文体の癖によって、CPU内部に蓄積された、手前の意識そのものよ。手前の膨大な量の打ち込みデータを勝手に解析させてもらい、その中から選り分けられた手前の一部だ」水西を突き放した。「言うなれば、お前のコピーでもあるんじゃない、コラ」

「わ…分からん」よろめくように椅子に掛け、水西は問う。「あんたが、どうしてこの世界に出現し、存在できているのか。そのメカニズムが分からん」

「先ず、お前が最近したことを、全て思い出させてやらにやあな。」

お前、最近パソコンをダチからもらったな」

水西は、机に乗る古い型のパソコンを横目で見て、頷く。理学部で情報工学を教える友人から貰ったものだ。“破壊衝動”は続ける。

「当たり前だよな。これは事実なものな。その中には、友人のOSが入ってた。友人はお前にパソコンを渡す前に、自分のデータを全て消した。しかし、データ自体は消えてもソフトは幾つか残してお前に渡した訳だ。その中には、そいつがお遊びで作った、詰まらんソフトが入ってた。『Genesis A-E』とかいう…」

水西は思い出した。2、3日前、なぐさみに少しいじり、すっかり忘れていたものだ。スクリーン・サーバーの画面上を走り回るキャラクターを、独自に作り出すソフトである。指示に沿って自分の名前、生年月日や血液型、身長・体重などを入力すると、それに応じたキャラクターが出来上がり、それがスクリーン・サーバー起動時になるとその世界の時間で生活し、箱庭的世界でその生き様を“鑑賞”できるというものだ。顔写真までスキャナで取り込むことができ、特筆すべきは自分の日記や考えを記した文章など、テキスト形式の文書をそこにアップ・ロードすると、それに応じた人格に生まれ変わる。水西も論文で疲れた時など、自分の過去の文章をどんどん放り込み、そのキャラクターがどう変わるかを見守っていたのだが、いつしか飽きていじるのを止めてしまっていた。

「そのソフトにな、お前、自分の文章を放り込んで、そのままにしていたもんだから、起動してない時も、ソフトが勝手にお前の“複製”を作り始めたんだ。文章つてのは、言ってみれば手前の思考、手前の遺伝情報そのものだ。遺伝情報を与えられ、母体の役割を果たすそのソフトが暴走してクローンを造り始めちゃったのよ。もちろん、最初はパソコン内だけで手前を複製してたんだが、お前、停止のコマンドを出してなかったもんだから、パソコン内がそのクローンで一杯になってきやがった。そこへウイルスが紛れ込んで来た」

「それに、どういう意味が…？」

「まあ、最後まで聞け。ウイルスってのはもともと、細胞の遺伝

情報に損傷を与え、遺伝情報を一部書き換えちまう働きを持つてゐる。そうになると、突然変異の子供が生まれたりする」「破壊衝動」は得意げな目をした。「そこで、今度は正常なお前のコピーばかりじゃなく、お前の異常性のみを受け継ぐクローンが作られ出した。それが、おれ様であり、他にも生まれた仲間たちなんだ。さつき、異常な脳波を出す奴がいたな」

「あ、ああ」水西は河合の助手、杉山を思い浮かべた。

「その人間の脳波が先ず“響いた”。更にお前、パソコン本体を殴つたろ」

「あ、ああ」水西は、恥ずかしさで俯いた。

「メモリーが飽和状態になって臨界点に達していた時にそういうシヨックを受けたもんだから、そのうちの人格の一つである、おれ様がこの世界に出て来てしまったんだ」

水西は、まだ信じられない思いで聞いていた。

「この後もおれの仲間たち、いやおれとお前の分身である人格の一部が、ゾロゾロ出て来る可能性があるな」「破壊衝動」は得意げな顔になった。

「嘘だ、嘘だ！ 手前、もっともらしいことばかりホザきやがって。おれは今、幻覚を見てるんだ」

「馬鹿言え。おれは現にここに、存在してるぜ」「破壊衝動」はケタケタ笑う。

「いや、おれは疲れてるんだ。多重人格の発症を幻覚として自己認識してしまった、稀なケースにぶち当たったんだ……」「破壊衝動」を無視するように、水西は掌を顔にあてた。

その時、ノックの音がした。

「わ。わ。誰か来た。お前、隠れるよ」水西は入口のドアを見て飛び上がった。

「イヤだね。お前、おれのことを幻覚だと思ってるんだろ？ なら良いじゃないか。このまま居させろよ。おれが幻覚なら、相手には

見えねはずなんだから」

「う、うるさい！ 目障りだ。とにかく隠れろ」水西が“破壊衝動”につかみかかった途端、

「うぜえ！」“破壊衝動”は恐ろしい形相になり、逆に水西の頬を殴りつけた。

「うぐ」豚のようにころがると、水西は机の脇の大きなキャビネの陰に倒れた。

ドアが開く。

いささかなりとも別人格の存在を信じずにいらなかった水西は出てゆくのがためらわれ、「畜生。結局、おれが隠れる羽目になっちまった…」キャビネの陰に隠れたままである。

「水西さん、ちよつと…」入って来たのは、教授の河合である。「さっきの話の続きなんだが…」警戒するように廊下を見てから、後ろ手にドアを閉めた。鼻息が荒い。

“破壊衝動”はテールに浅く腰掛け、不敵な笑みを浮かべる。「何の用だ？ そんな恐い顔して」

「さっきの発言を、撤回しろ」取り憑かれたように目を血走らせ、河合は叫ぶ。「キリストの聖性だと？ フン。まあ、それは認めてやる。だが、お前のさっきの態度、あれはキリスト教以外は認めないというような、排他的なものだ。いかん。あのままじゃ、いかん」

「おいおい、どうした？ おれに、ケンカ売りに来たのか？」テールブルから下り、“破壊衝動”は身構えた。

不敵な笑みに、河合は逆上した。「な、なな何だその態度！？」

キー！ み水西、お前いつからそんな生意気に！ 前はもっと素直だったじゃないか」

「生憎だな！ 今のおれならお前くらい、ゴミクス同様にひねり捨ててやれるんでな」“破壊衝動”はまた笑う。

「ゆ…許さん！」河合が長身をかぶせるように、“破壊衝動”に飛びかかった。

その時、“破壊衝動”のアップーが河合の顎を見事に突き上げた。蹴り飛ばされた野良犬のような声を出し、河合は床に卒倒した。

「馬鹿めが…」息一つ切らさず、“破壊衝動”は冷笑すると水西に向き直った。「分かったか…？ おれが、明らかな存在だってことが…」床に気絶する河合を指差した。

「お、お前は…ヒドい奴だ！」水西はキャビネットにしがみつки、震える声で言う。

「黙れ！ このおれ様自身が、お前の一部だってこと、覚えとけ。

この行為は、間違いなくお前の無意識から生まれてるってことをな」そう言つと、“破壊衝動”は研究室から出て行った。

「あ、あわわわ…あいつ、いや、おれの分身、どこへ行きやがる…」

その時、河合が気づいた。「きゃ、きゃあー！」水西を見て尻をついたまま後じさると、「助けてくれ！ か、神さま。いや、仏さま」研究室から飛び出して行く。

啞然としたままの水西は、研究室にひとり取り残された。

下の中央広場では、素っ裸の男が、寒風吹きすさぶキャンパスを走り回っていた。

「きゃあー」

「うわッ」

「ヘンタイだ」クリスマスのイルミネーションが施された杉の木の周りを、ぐるぐると回る小太りの男。これから街に繰り出そうと集まっていた学生たちや、遠巻きに見守るカップルたちの視線をもつともせず、下半身を勃起させたまま、男は白く醜い腹を震わせながら、走り回っていた。

図書館前では、スノーボードを抱えた長髪の学生が爆笑してその男を指差す。「おいおい、

あれ見ろ、あれ。やべーよ。ぎやははは」

もう一人のスキン・ヘッドも指差して笑う。「余りの寒さに発狂し

て、どっかのホームレ

スが、紛れ込んで来たんじゃない？」

「いや、あれ…センサーだぜ」真面目そうな文学部の学生が、啞然として言った。「おれ、一年の時、一般教養で受けたことがある。名前、何だったっけ。確か…」彼は頭を掻いた。

「水西敏男。西洋美術史の…」女性の声がした。三人が振り向くと、松田真奈美が蒼い顔をして立っていた。唇と手が、小刻みに震えている。「センス…何やってるのよ…こんなところで…」

「あああ？ あはあ？ あははははは。ポクチン、『露出狂』だよお…」水西の分身、「露出狂」は図書館前で立ち尽くす真奈美を見つけると、一目散に彼女に向かって来た。「ま、松田くんであっ。見てみて、おれのモノをみてくれよぉっ！」

「きゃあっ！」真奈美は本を抱えながら、一目散に学食へ駆け込んだ。「来ないでヘンタイ！」

「はあ、はあ。もう、タマラあゝん」彼女を追う“露出狂”が図書館前の群集に向かって行くと、「うお」「きゃあ」と学生たちのどよめきが上がる。しかし、隣接する学食のドアを開けようとした瞬間、“露出狂”は前に立ちはだかった学生のパンチで広場に転がされることとなった。

「先生…何てザマだよ…」拳を鳴らし、鼻血を流す水西を見下ろすのは、ゼミ生の木村だった。「正気の沙汰じゃないっスよ…」

「ねえね、コノ人、アンタの先生なの…？」豪華なコートを着た女子学生は、ニヤニヤと木村を見る。

「ああ…」木村は気まずそうに頭を掻いた。

やがて、水西がへらへらした表情のまま、ムクリ起き上がる。そしてスクワットの姿勢になると、自分の性器をしごき始めた。

「きゃあっ！」木村の彼女が目を覆う。木村も言葉が出ず、口をパクパクさせる。事務職員たちも駈けつけ、広場は再び叫喚の渦と化した。

暗い大教室。外の杉の木の天辺と、すっかり暗くなった冬空の下に輝く街の明かりを横顔に受け、大佛は一人、画集を眺めていた。大佛が見詰めるのはミケランジェロの「アダムの創造」であり、血走ったその目はアダムの肉体に向けられていた。

「美しい…」大佛は大きく、溜息を漏らした。指が、今しも創造されたばかりのアダムの姿をなぞる。「この美しさに向けられた愛が、不純なものだと？ ふざける！ おれは、おれはただ純粋に…」そう言いつつも大佛は、アダムの胸板から目を離すことができない。

「純粋にこの美しさを愛し…」ごくり、唾を飲み込む。「美しさを愛し…」周りをキョロキョロ見回すと、大佛はズボンを下ろし始めた。

ガタン、教室の後ろで、物音がした。

「だ、誰だ！」大佛は慌てて立ち上がり、背後を振り返る。シクシクと噁り泣きも聞こえてきた。ズボンをずり上げ、大佛は上り階段になっている大講義室の後部へ、恐る恐る近付いて行く。机に近付くにつれ、噁り泣きが一層大きくなる。首を伸ばし、そっと机の背後を見ると、そこには水西の姿があった。

「先生…」大佛は複雑な表情で水西を見た。「どうしてこんなところに…」

「ひいつ」弱々しく叫ぶと、その男は頭を抱え、地面に伏してしまった。「た、叩かないでボクはボクは、『自己愛』またの名を『ナルシズム』」「ナルシズム」はそう言つと、大佛に尻を向け、震え出した。

「へ…？ 何を言ってるんです、先生？」少々戸惑った後、大佛は急に嗜虐的な笑みを浮かべると、しゃがみ込んだ。「先生…授業では言い足りないこと、いっぱいあるんですけど、いま、聞いてもらえますか？」

「ひいつ。わかりました分かりました。何でも聞きますから、勘弁してボクを傷つけないでボクはボク自身が一番可愛いものだから」「ナルシズム」は涙で光る顔を上げ、情けない声で言った。

「おれの意見で、どうしてこうもみんなに受け入れられないんでしようね？」大佛は挑戦的な目になり、半ば脅すように言う。「先生だけは、おれの意見を尊重してくれますよね。因みに今日のおれの説、正しかったっすね？」

“ナルシズム”は首を激しく縦に振る。

「ありがとう…先生だけは、分かってくれると思ってました」大佛は泣き笑いのような顔になった。

“ナルシズム”は涙を拭って能天気にも口を開いた。

「あなたも私の仲間、仲間。なぜなら、自分が一番だと思ってるでしょ？自分がどう見られてるか、凄く気にしてるでしょ？ナルシストでしょ？いや、オナニストかな」ケタケタ笑った。

大佛の表情が変わった。「せ…せん…せい…私が『ナルシスト』とは？ いったい、どういう意味ですか？」固く握った拳が震えている。

「だから、自分のことが一番大切な、我がままなオナニ野郎ということだよ。オナニストは相手を愛するより自分を愛する方を愛す。何せ、相手を悦ばすより、自分を悦ばせることしかできないんだもん。言ってみれば、キミは怠け者だ」大佛を指差して笑う。

「怠け者じゃない！客観的に見ても、おれは…」

「客観的なんて言葉、そんな気安く使うもんじゃないよ。キミ、下手したら世界一の勘違い王にもなれるネ。キミはボクの仲間。究極のオナニストだ。いつも自分がどう見えるかを気にしてそれによって一喜一憂してるでしょ。ボクは知ってるよ。仲間を見つけてられて嬉しいよボクは。キョキョキョ。…あれ…何をそんなに顔赤くしてあれ？どうしたの黙っちゃって…？」“ナルシズム”は自分の身体をさすり、へつらうように大佛を見上げた。

大佛は黙ったまま拳を震わせ、“ナルシズム”に歩み寄る。

「…あれ？あれ？おかしいよ？どうしたの？仲良くしよう…え？何か悪いこと言ったかな？」

「…殺す」低く、押し殺した声が聞こえた。

「…ひっ」“ナルシシズム”は怯え、あとじさった。

大佛は尚も歩み寄る。

「何を言うのサ。嫌だよボクは傷付きたくないんだよ。ボクの自我は豆腐のようにブヨブヨで、すぐに崩れる脆いものなのだから。…あ、分かった！ キミもボクと同じ仲間だから、自我が腐ったミカン並みに脆いんだ」

「黙れ、このクソ！」とうとう大佛は“ナルシシズム”に手を伸ばした。

「ひいっ！ 助けてっ」“ナルシシズム”は突然立ち上がると、教室の後ろから廊下に飛び出た。

「待てこのガキあ！」大佛も信じられないスピードで駆けてきた。

“ナルシシズム”は廊下の角を曲がる。
それを追う大佛。

大佛が廊下の角に差し掛かったところへ、入れ替わりに“破壊衝動”が出てきた。

「観念したか！」大佛が拳を振り上げた。

しかしその時既に、“破壊衝動”の拳は大佛のふくよかな頬に埋まっていた。屠殺される豚のように叫ぶと、大佛はその場に卒倒した。

「…ケツ、ルールも無しに突然手前から喧嘩売っというて、カウンタ―一発で沈むたあ世話ねえや。この間抜け」歩み去る“破壊衝動”。

「ふわあああん。許さねえぞ…」大佛は鼻血を垂らしながら肘をつき起き上がろうとするも、既に“破壊衝動”はいない。「…ツキシヨ―！ クソ！ 死ね！ 殺す、絶対殺す。ブツツ殺す！」残された大佛は涙を大量に流し、床をガンガン叩き続けた。

ラジオからはワム！が流れる。研究室では、頭を冷やした水西が足を組み、論文にかかりきりになっていた。

「…せつかく落ち着いたと思ったら、今度は周りが騒がしくなってきた来やがって…」

独りブツブツつぶやいていると、真奈美が飛び込んで来た。

「先生！」

「どうした松田くん？」

振り向いた水西の頬に、真奈美が突然、平手打ちを食らわす。絶叫し、床に転がる水西。

「サイテー！ 先生が、あんなことする人だなんて……」真奈美は再び泣き叫んだ。「よくそんな澄ました顔してられるわね。先生、ひよっとして二重人格！？ 普段、自分の気持ちに忠実に生きてないから、そうなっちゃうのよ。完全な変態よ。きつとあれば、変態性欲の顕れに違いないわ」

「ちよ、ちよちよと待て。おれが何したっての？」水西は迫り来る真奈美を押し留め、言う。

「呆れた……」真奈美はかぶりを振って言う。「やつぱり二重人格なのよ！ 覚えてないの、先生？ 下の広場でのこと……」

「お、おいおい、何なんだよ。このおれは、ずっとここに居たさ」水西も真剣な顔になった。

「ウソ……」真奈美の声のトーンが下がった。

「ホントだって！」水西の声に怒気が含まれ、真奈美も動きを止めた。

「じゃ……あの裸のセンセイは……？」

「裸の……オレ」？ 何だ、そりゃ？」

真奈美は、下の広場で見た一部始終を水西に伝えた。

聞き終えた水西の顔面は蒼白になった。

「……それは、おれの一部だ」唇が震えている。

その時、ラジオから女性パーソナリティーの絶叫が聞こえた。

「きゃあ〜！ 何すんのよ！ 出ていきなさい」

水西と真奈美は動きを止め、ラジオに耳を傾けた。

ガタガタ、バタバタと物が崩れる音や慌しい足音が聞こえる。続いて、水西とそっくりの、いや水西本人と同じ声が聞こえて来た。

「皆さんこんばんはあ〜。ケケケケ。『皮肉』またの名を『アマノ

ジャク”です。クソ面白くもねえクリスマス。チャラチャラ浮つきやがるお前らに、おれ様が人間の醜さを教えてやる」

「先ず来てるメールを読んでやるうか、ケケケ。何なにい…？ 八王子から。『祥子から宏昌へ』ケツ」そう言うと、“アマノジャク”はわざと浮ついた、甘ったるい声を出した。「『覚えてるかなあ…一年前のデイズニー・シー。喧嘩した後くれた、ミーシャのCD。そこにはこう書いてあったネ。“色んな過ちをしたオレだけど、もう決して放さない。ぼくのミニーへ”。大感動だったよ。今まで以上にあふれてる…メリー・クリスマス』…ギャー助けて！ 虫唾が！ 虫酸が全身を駆け巡る。堪らん死ぬ！」身体を大げさに掻きむしる音が聞こえる。

「次だ。『桃子…ずっと一緒に居てくれよ』…直接言え。どうしても皆んな、自分達の恋愛を人に見せびらかせたがる？ ああ、一億総出たがり見せたがり屋時代。誰も手前らの色恋沙汰、知りたくねえんだよ。そんな醜い自己顕示、サイト上の個人HPだけで沢山だ」水西と真奈美は顔を見合わせた。

「…センセ、今の声、先生のに似てましたけど…？」真奈美は目を丸くしたままラジオを指差す。

「…どうしてラジオにまで…」水西は頭を抱えた。そして、傍らのテレビに飛びついた。

スイッチを入れると、ベテランのお笑い芸人が女性アナウンサーと、躁病的に喋っている。

「芦屋マグロの、『お電話サンタ』やあ〜！ クリスマスの笑い話・悲惨話を、電話リクエストで大募集するでえ〜。次の電話は、誰かなかな…」

その明るいスタジオの中に、突如闖入して来るものがあつた。数倍呆けた顔をした水西である。

「こんばんはあ〜。“目立ちたがり”ですう」

「な、何やじぶん！」指をさし、身構える芸人。女性アナウンサーも固まってしまっている。

「だからあ、“目立ちたがり”だよーん。おいらも映して、映して。もっと目立たせておくれよあ」全身を動かし、画面いっぱい走り回る。

「出てけ、生放送やぞ！ わいの番組や。邪魔すな！ あっ」芸人の背後に、また水西が出て来た。「何や何や、今度は誰や。双子かいな」

「こんばんはあ。“寂しがり”ですう」そう言うと、バレリーナのような小刻みな歩みでのおどおど出て来た。「仲間に入れてよ。…ここ、賑やかでいいネ…」

「“欲しがり”です」女性アナウンサーの背後に、指をくわえた水西がいつの間にか立っていた。

「きや。何とかしてよあ」叫ぶアナウンサー。

しかし、水西の分身は増え続ける。

「喋りたがり」です」

「“痩せたがり”」

「“ガリガリ”」

水西はチャンネルを変えた。

ニュースになった。都心にいるアナウンサーが、歩道を歩く大勢の“水西たち”の中で叫んでいた。

「これはいつたい、どういうことでしょうか！？ 多数の男性が、街を埋め尽くそうとしています。皆、同一人物に見受けられます。

まるで全員、クローン技術によって作り出されたかのようにも見受けられ…」

アナウンサーの吐く息は白く、背後には雪がチラつき始めていた。背後では沢山の水西たちが、デパートのオモチャ売場に解き放たれた狂喜する子供のように町じゅうを駆け巡り、ある者は笑いある者は泣き、ある者は叫びながら狼藉をはたらく始末。

水西は蒼い顔で、その場にヘタヘタと崩れ落ちた。真奈美は片手で額を覆い、天を仰いだまま椅子に腰を落とした。

「…センセ…わたしにも…事情がつかめてきました…」

「分かったか…？」水西も、投げ遣りに外を見詰めた。ふと顔を両手に埋めた直後、彼は飛び上がった。「ぎゃ！手が！おれの手が！」

水西の手が半透明に透けている。街のイルミネーションが、掌を通して光っていた。

「どういうことだ！？　いったいどういうこと…！？」慌てて立ち上がると、水西は爪先から胸元までをざっと見渡した。足の甲を透かしてこげ茶色の床板が見える。「おれの存在が希薄になっているのか…？」

「何かあの、先生の“分身”が関係してるんじゃない？」真奈美が蒼い顔で言う。

「分かった！」水西は飛び上がった。「増えすぎたクローンのせいで、おれという存在の濃度が下がり、おれの身体 of 分子構造の構築が物理的に薄まっているのだ。クローンとは、そもそも分裂した精子の核から取り出したDNAを、多数の卵子に組み込む作業から生まれる。コピーとは、した分だけ原本に比べ、“色”や“写り”が粗雑で薄いもの。ましてクローンを造るためにコピーした核は、オリジナルよりは抵抗力等も弱いと聞く。サイバー・スペースを利用しておれが増えた分、現実世界のおれの肉体にも影響が出て来やがったのだ」

「どうなるの？　センス、どうなっちゃうの！？　最後には消えちゃうじゃない…！　うわああん！」

真奈美の言うとおりだった。元々一つだった水西という存在を分裂させて増やした結果、“オリジナル”水西の“濃度”が下がり、次第に存在自体が希薄になっているようだった。「このままじゃ、消えちゃうよー！」

「知らん…私もどうすれば良いのか…分からん…」水西は頭を激しく振った。「ああ…気のせいか、意識までもが霞が掛かったように、薄れゆく気がする…」彼はひざまずき、降り落ちる雪を見上げた。

「主よ父よ…どうすれば、私は一体どうすれば…？」

学生食堂。まだ多くの学生が、翌日から授業のない気楽さから、気の合う者同士、残って談笑していた。

顔を痛々しく腫れ上がらせた大佛が、血走った眼で食堂に入ってくる。彼はいちど食券売場で立ち止まり、食堂全体を見回した。

大佛の目線の動きが止まり、一点に凝縮された。

その目は人込みの中、カツ丼を頬張る水西を捉えていた。大佛は学生達を縫って静かに水西のテーブルに近付くと、ポケットから小さなナイフを取り出した。

水西は箸を止め、白痴のように大佛を見上げる。

「先生…あなたは、言うてはいけないことを、言うてしまった…これは、当然の報いとして受けるべき罰なのだ…」独り言のように呟くと、ナイフをかざし、水西の正面に立って叫んだ。

「覚悟！」

水西は次の瞬間、口の中で咀嚼していたカツ丼を「ぶほおっ」吹き出した。唾液にまみれた豚肉や衣や米粒が大佛の顔にかかる。水西は目を見開いたまま、食器に覆い被さるように前に突っ伏した。食器が散らばる派手な音がし、周囲の学生が「わっ」「きゃあ」声を上げる。

水西の背中にはドスが深ぶかと刺さり、その背後には教授の河合が立っていた。

「…お前が、お前があんなに調子に乗らなければ良かったんだ…」真つ赤な顔をした河合はつい今しがた刃物を握っていた手をブルブル震わせ、水西の背中に呟いていた。

「ひ、ひいっ」大佛は後ろへ飛びのき、椅子にぶつかって尻餅をつく。

河合は肩で息をし、水西の背中に突き立ったドスを見詰めていた。しかし傷口からは一向に血が滲み出て来ず、河合の頭には、次第に不安混じりの疑問が湧いて来た。「おい…何だ…こいつは…？」周囲の学生たちからも、不審の聲が上がり始める。

「おい、血が出てないよ」

「マネキンみたい…」

「あ。見る、見る！」一人の学生が水西の死体を指差し叫んだ。

死体の表面の色が褪せ、みるみるうちに透明になって行く。皆が固唾を飲んで見守る中、死体はあつという間に消え失せた。

暫く呆然と突っ立っていた河合はふと我に返ると、頭を大きく振った。「お、おお…どうなってるんだ…??」そして食堂の入口へと走り出した。

ゲロまみれの大佛もフゴフゴ言いながら、とりあえず河合の後を追う。

二人は学食を出ると、突如立ち尽くした。

目の前を、まる裸の水西が間抜け面をさらして横切っていく。

「うわ、うわ！」“露出狂”を指差したまま、河合は叫んだ。

「きゃ、きゃあゝ！」女のような悲鳴を上げたのは大佛だった。「い、いやん！」両手で顔を覆うも、指と指の間が大きく開かれ、言葉とは裏腹にその目は嬉々として“露出狂”の股間を見詰めているではないか。やがて、彼は破裂しそうな股間を押さえてうずくまった。「う、うお…イテテ…」

“露出狂”は二人の目の前を通り過ぎると、二人にはまったく気付かぬ様子で文学部棟の方へ走り去って行った。

「何してる！行くぞ」気を取り直した河合が、しゃがみ込む大佛の襟をつかんだ。

大佛がどこへ行くのかと問うと、河合は水西の研究室へだと言った。

「水西は、水西の“本体”は今どうなっているのか、それを確かめに行かねばならん」決然とした足どりで、河合は前かがみになった大佛を連れて雪の中、文学部棟へと向かう。

「…ああ！…つま先が…完全に見えなくなってきた…指先もだ…！」再び研究室。水西は真奈美の腕に抱かれたまま、呟いた。声は、

次第に弱々しく、生気の無いものになってきている。

「先生、センセ！　しっかりしてよ！　大丈夫。何か、きつと何か、方法はあるはずなんだから」

そこへ、大佛と河合が勢いよくドアを開け、入ってきた。

「水西！　これは、いったいどういうことだ！？」河合は先ほどの冷めやらぬ激昂と知的刺激とで声をうわずらせ、叫んだ。「お前、いつからあんな分身を……！？」

「センセツ！　何です！？　いったい何ですかそのお姿はツ！？」半透明の水西を指差し、大佛も驚愕する。

河合も淡い水西の姿に、突如不安そうな表情になる。「おい、大丈夫か？」

水西は男二人に不安げな一瞥をくると、直ぐに大儀そうに視線を戻し、目を閉じてしまった。息が荒い。

「元はと言えば、あんたたちがいつもいつも、先生に迷惑ばかり掛けてるからこうなっちゃったのよ！」真奈美がヤケになって叫ぶ。「どうしてくれるのよ！」

「そ、そんなこと言われても……根拠なんて何もないじゃないか……」河合は困惑して視線を落とした。

大佛は憤って叫ぶ。「言いがかりだ！　松田さん！　それは言いがかりだ！　僕に研究発表の内容で勝てないからって、この場を利用して僕への普段の恨みつらみを晴らすうだなんて、あんたも随分陰険だな！　そう言えば、昼間の議論もまだ決着が……」

「うるさい。この隠れホモ！　女々しいんだよ、おめーはよお。ああ、昼間の議論かあ？」

そんなにお望みなら、受けて立ってやるよ」真奈美の表情が変わった。水西の上半身を抱き抱えたまま、狂ったようにまくし立てる。

「だいたいなあ、ガイド・レーニが好きなのは、実はおめえ自身なんだろ？　『サン・セバスチャンの殉教』にしたって、手前が大好きな材料だからこそ、あんなに入れ込んでる訳だろ？　結局、あんたらホモたちの性愛ペットの役割ぐらいしか、あの絵にはねえんだ

よ」

河合と大佛は毒気を抜かれたように、啞然と立ち尽くしている。水西さえも、口と目を大きく開いたまま、真奈美を見上げていた。

「ち…」大佛も漸く口を開いた。「面白い！ 松田さん、あんたは大きな誤解をしている。ああいう殉教図が本当に大切な役割を持っていたことを、知らないんだ！ 中世ヨーロッパにおいて、サン・セバスチャンを始めとする殉教者たちは、様々な地域の守護聖者として扱われていたんだぞ」

「守護聖者…？ フン、だから、同性愛者たちの、でしょ？」幾分落ち着いた真奈美は鼻で笑う。

「違う！ 疫病だ！ 彼らは疫病に対する守護聖者だったんだ！ ペストが流行った14世紀以降、ああいった殉教者たちは、度々疫病の襲来に見舞われながらも生き残った人々によって、疫病や災厄から守ってくれる存在として感謝の意味をこめて偶像化され、描かれ、町々で飾られたものだったと云う！ 言ってみれば、当時の人々はペストなどの疫病をキリスト教受難期の古代における迫害者に重ね合わせ、迫害の苦難を乗り越えたサン・セバスチャンを始めとする殉教者たちに逆境に対応する強さを見出し、救いを求めたという訳さ。わはは。どうだ、一方的な決めつけしか出来ぬこの単細胞め」

「ウソ！ 嘘よ」真奈美は大きくかぶりを振った。

「いや…本当だ。大佛君の言ってることは、当たっている」水西は虚ろな目で真奈美の顔と天井を見上げながら、荒い息で呟いた。「…確かに後から、同性愛者の格好の餌として隠れた意味を持つに至ったが、その前は、純粹に守護に対する感謝を込めて描かれたんだ…」

「なるほど…ペストか。ウィルス性の伝染病に対する、救いの役割を絵に求めたって訳か…それなら、中国や東アジアの国々にだって幾つか例が…」あこの髭をなでながら、河合が感心したように呟いた。

「ウイルス…？ 待てよ」水西の目が光った。「今回のおれの分身も、そもそもはウイルスが原因だ。松田くん、私の分身たちは、そのパソコンから、ウイルスをきっかけとして生み出され、はびこったんだ」

「ホントなの、センス？」真奈美は静かに問いかけた。

水西は決然と頷いた。そして、憤るように叫んだ。

「どうしてこんな簡単なことに、気付かなかったんだ！ ええい、クソ！ おい、大佛くん、いや、河合さんでもいい、パソコンを、そのパソコンの電源を切ってくれ！」

大佛はパソコンに走り寄ると、マウスに手をかけ、「終了」のコマンドをクリックする。

しかし、電源は落ちなかった。

「おい、…ど、どういうことだ！」大佛は頭を抱えた。「プログラムを終了させられない！」

画面には、「input the password」の文字が。「冗談じゃないわ！ どうして！？ どうしてよ！？」

「…恐らく、ウイルスの意志だ。宿主すなわちコンピュータの死は、それに宿る彼らウイルスの死をも意味する。わたしがこの機をもらい受けた時点でのスクリーン・セーバーのプログラムのそもその存在意義とは別に、ウイルスによって自己増殖の指令を受けた時点から、クローンのプログラムは自己の死を防御する手段を身に付けたに違いない！」水西は淡々と語った。

「でも、パスワードがある筈だ。それを入力すれば…何だ、そのパスワードとは、何だ？」

河合は腕を組んだ。

「そんなことより、強制終了ですよ！ 電源プラグを引っこ抜けば、簡単に…」コンピュータの裏に手を伸ばし、大佛は電源プラグに手を触れる。その瞬間、大佛の手に電源が流れた。

「ぎゃあっ」感電した大佛は後方に吹っ飛び、キャビネに後頭部を打ち付けた。

画面に、“破壊衝動”の顔が現れた。同時に文字が浮びあがり、水西の声でその顔が喋り始めた。

「無駄なことを…。おれたちは、この母体と繋がっている。おれたちの生存の邪魔をする奴は、いかなる奴でも阻止する。言わば、このコンピュータこそが、おれたちを産んだ母。そして同時に、神たる父。神聖なる父を傷つけるものは、なんたりとも、容赦はせぬ良いか。おれたちは、繋がっている」

「そうか…。おれが以前から打ち込んでいた文章から、言葉を選んでいるのだ。それにしても、変な文章を組み立てやがって…。」水西は感心したように言う。

「何よ！ 何なのよ！」真奈美が叫んだ。「どうしても、電源を切らせてくれない訳…？ 悪魔、アクマよ！ この機械には、悪魔の意思が働いているんだわ！」

「ああ、コンピュータに紛れ込んだウィルスの存在と、そいつらの自己保存本能をそう呼べるのなら、こいつらのその存在にかける情熱こそ、“悪魔の意思”と呼べるんだろうな…。」ますます薄くなつて行く自分の身体を眺め、水西は弱々しく呟いた。「ああ！ もう、おれの存在もいよいよ消滅しつつある。何故だ。何故わたしなんだ。これも試練か。それとも、神はわたしを見放してしまわれたか。いや、そもそも神は、存在するのか…？」敬虔なクリスチャンを常日頃から自認していた水西は、初めて神への反感を口にした。「今ではヨブの気持ちがよく分かる…。神よ、わたしはあなたに向かつて叫んでいるのにあなたは答えにならない！ 畜生」水西の目尻から涙がひと筋垂れ、耳もとで止まった。

「とにかく、パスワードだ。そいつを見つければ…。」河合が唸る。そして、真顔になって言った。「死ぬな、水西。おれたちが、何とかしてやるからな」

「でも…何を入れれば…アルファベットののみか…」起き上がった大佛は、適当に言葉を入れる。「『stop』…ダメだ。うっ…じゃ、ローマ字入力で“消えろ”だから『kiero』。…畜生、ダメだ。

えつと、じゃ、“消す”を英語で…何だったっけ…あ、そうだ、『erase』…あちゃ、ダメだ」

「バカ…」脇で、河合が呆れて見守る。

「ケケケケ…無理だ。ムリ、“だっちゅーの！”」「破壊衝動」が画面の中で笑う。

「だっちゅーの」だと…？ ああ…おれは、あんな恥ずかしい言葉まで使ってたのか…」水西は赤面し、顔を背けた。

「…助けて」『tasukete』、ダメだ。ならば、もっと難しい英単語だ。『vanish』、『expel』…ダメだ」大佛は頭を抱える。「そうだ！ 守護聖人だから、『St. Sebastian』じゃないのか！？ ハハ、さっき言っただけじゃないか。どうしてこんなことに気づかなかったんだ！ おれって、頭いい！ よし、入力、と…アレ？ ああ…！ これもダメだ！」

呆れた河合は、脇から言った。

「おい、何か一連のフレーズじゃないのか？ 例えば、有名な物語の文句とか、偉人の格言とか…」

「そうか、それもあり得るわよ…」真奈美の目が輝く。「とにかく、先生が消えてしまう前に早く！」

水西は、再び苦しそうに目を閉じている。もう、殆ど透明になりかかっている。

「わはははは！ こいつが消えれば、おれたちの存在が、この世で正当化されるのだ」「破壊衝動」が得意げに言う。「早く、時間よ経て！ この馬鹿どもが愚行を繰り返す間に。このキリストの聖夜に、おれたちは栄える。『ホーリー・ナイト』！」

「『ホーリー・ナイト』…恥ずかしい言葉だ…」水西は目を閉じたまま、再び赤面した。

「でも、でも何なんだ！ 有名な文句なんて、幾らでもあるぜ」大佛は、泣くような声を出した。河合も、黙ってうなだれたまま。

その時、ドアが開いた。

河合の助手、杉山が立っていた。顔を紅潮させ、目をギラギラさ

せている。

「河合センセ……」杉山は、MDを片手に河合に近付いた。「やっと見つけたわ……今まで、何をしてらして……？」

「な、何の用だ……」ギョツとした様子で杉山を見詰めると、河合は後ずさった。

「センセ……わたし、先生のために、詩を書いて、それをこれに、吹き込みましたの」杉山はそう言うと、片手にあるMDを差し出した。「……どうか、どうか聴いてくださいまし……先生のために、命を、魂を吹き込んでおります……いいえ、わたし自身が、こもっております……」普段の狂騒的な荒々しさは鳴りをひそめ、頬を赤らめて粛々としている様が、却って不気味ですらある。

黒々と渦巻く、大洋の潮のうねりのような執念に恐怖を覚え、河合は言った。「いや……結構」以前も河合への賛美と愛を歌い上げた、技術的に稚拙で聞くに堪えない、それでいて吐き気をもよおす情念のみが感じ取れる詩の録音を聞かされ、河合は寝込んだことがある。「君の思いは……もう……しっかり受け取ってるから……」引き攣った笑いを浮かべ、河合は手を振った。

「うきい……」突如、杉山が叫んだ。「あたいの、あたいの思いは先生が思ってる以上であって……」全身をブルブル震わせ、MDを握り潰してしまった。「そうまで言うなら、抱いてくださいまし！今ここで、あたいを抱いてくださいまし！」厚いレンズの奥の瞳の焦点が、合っていない。

「ヒツ、嫌だ！ 勘弁してくれ！」河合はおののいて言った。「こんな非常時に君は……」

「いいから、抱け……！」怒り狂った杉山は、本棚に背を付けた河合に突進した。

皆が止める間もなく、杉山は河合に飛び掛った。しかし河合はとつさに脇へ避け、勢いを止められなかった杉山は本棚に激突した。「ぎゃ」そう言うと、顔面を厚い背表紙に押し付けたまま、ズルズルと床に沈みこんだ。

上から厚手の本が一冊、落ち、床にページを広げた。

肩で息をしていた河合が、それを拾い上げる。「『聖書』…？」

落ちた時のままのページを、何気なく読み始める。

「『ヨハネによる福音書』…『15』の…『1』…。『イエスはまことのぶどうの木』…？」

その時、画面上の“破壊衝動”が一瞬「ウツ」と唸り、顔をしかめた。

「それよ！ それを入れてみて！」真奈美が目を輝かせた。「さつき先生、『何か文章のようなものを』って言ったでしょ？ 聖書よ、聖書の文句を入れてみたら…！？」

「お、おう…。そうか、そうだな。水西の使っていたパソコンだ。聖書の言葉が、奴らを撃退するキー・ワードになるかもしれない！ 何なに…」そう言うと、河合は更に、「ヨハネによる福音書」の冒頭部分を読み進める。「『わたしはまことのぶどうの木、…わたしにつながっていないながら、実を結ばない枝はみな、父が取り除かれる。…わたしにつながっていないさい。…ぶどうの枝が、木につながっていないければ、自分では実を結ぶことができないように、あなたがたも、わたしにつながっていないければ、実を結ぶことができない…わたしをはなれては、あなががたは何もできないからである』…これだ！ おい、そのデブ！」

「デブじゃありません！」パソコン前に待機する大佛が真っ赤な顔をした。

「失敬。大佛くん、これを入れるんだ。ええと、この部分の、タイトルを言うから…英語で…」

「…『Jesus, the Real Vine』…」蚊の鳴くような声の水西が、うつすらと目を開け、大佛を見た。本来身体のあるべき部分は、殆ど床の模様しか見えない。

「先生、ありがとうございます！」慌てて大佛が、その言葉通りのパスワードを入力した。

画面上の“破壊衝動”の顔は、不敵に笑い、静止したままである。

水西、真奈美、河合、大佛…皆が画面を注視する。窓の外は、漆黒の夜空に深々と雪が降りしきっている。床には、杉山が倒れている。

やがて、“破壊衝動”の顔が歪み始めた。

「グ…クキキ…ウギ…うを、苦しい…苦しいヨ…」“破壊衝動”の顔は苦痛に益々歪み、画像も薄れ始めた。「お…おれたちの存在が…消して…なるもの…か」

「効いてる！ 早く、早く消えろ！」大佛が、机を拳で叩いた。

「繋がりが…父との繋がりが…ああ、もう、もう駄目だ…もう持ちこたえられぬ…我らが存在に懸ける意志…」画面が眩ゆく点滅した。「…兄弟よ…済まん…う…う…う…ギャー！」絶叫。その瞬間、画面はプツン、真っ暗になった。

ゴクリ。画面を見続けていた真奈美が、唾を飲み込む。

「や…」こめかみに汗を滲ませた大佛が、拳を握る。

「やったー！」河合が両手を挙げ、大佛に抱きついた。

「やったやったやった！」皆、飛び上がって狂喜する。

水西の身体が、徐々に実体化してくる。

やがて、完全に鮮明な肉体を取り戻した水西は起き上がり、真奈美を抱き寄せた。

「ありがとう…」

真奈美も涙を流し、微笑む。

「センセ、本当に良かったネ…ホントに心配したんだから…」

「は…あ、アツイ、熱い。でも今日ばかりは、キリストを信じてもいいかな、なんて思ったりもしたよ…」苦笑いした河合は、テレビをつけた。「おお、もう他の奴らも消え去ったみたいだぜ…」

9時のスポット・ニュースでは、先ほどの大量発生した水西が、全て忽然と姿を消したことを報じていた。しかし世の中に与えた衝撃も現実のものであり、解説者たちは、執拗にこの怪事件を分析していたし、警察側の発表は「この男の正体を突き止め、詳しく事情を訊きたい」としていた。

水西と河合は互いに顔を見合わせ、両手を両肩の上でそびやかした。

「これから、教授会で君の処遇を巡って、大変なことになりそうだな…」河合が笑う。

「ああ…トンだクリスマス・プレゼントって訳だ」水西は多少うんざりして言う。

ニュースは5分ほどで終わり、再びCMが流れる。ヴィング・クロスビーの「White Christmas」がBGMである。

「今日、初めてわたしを思ってくれる人の力、つまり君の“愛”を感じることができた…こんなの、初めてだ」水西は真奈美を見詰め、呟いた。

「センセ、…プレゼント、ホントのプレゼント、まだ渡してなかったわね…」そう言うと、真奈美は水西に軽くキスをした。「わたしは、今の先生の言葉…それだけで充分」

「『神への愛』と『人への愛』…二つはもちろん、両立するものだし、させなきゃいけない。この両方があつてこそ、人類は栄えて来たんじゃないか。今日、あいつらウィルスの、生命力にかける情念の凄まじさを目の当たりにして、現実に『生きる』って言葉の、本当の意味が理解できた。今までのわたしは、…いや、“おれ”は、単に真剣に『生き』てこなかっただけだ」

「…うれしい…。センセ、そうよ。何だか今の先生、生き活きて、とつても素敵」真奈美は再び水西に抱き付いた。

街には深々と雪が降り積もり、中央広場と杉の木も、真っ白になっていた。学生たちも疎らである。殆どが街に消えて行つたのだらう。守衛が一人、門の前に立っている。

「クツ…松田さん…」悔しそうに水西・真奈美の二人を見詰める大佛の肩に、河合が軽く手をかけた。

「…飲みに行くか…？ 失恋祝いだ」

「いや、クリスマス祝いですッ！」不貞腐れて大佛が叫ぶ。

「ま、それで良からう」苦笑いの河合は、言った。「…だが、東洋

の美術についても、しっかりと語ってやるからな」

「望むところです」

「年明けには、おれのゼミ生になってたりしてな…ヒヒ」

「おいおい、勘弁してくれよ。わたしの大切なゼミ要員を…」立ち上がった水西は、笑って言った。「わたしたちも一緒に入れてくれるんだろう？ ま、今夜はわたしの奢りだ。行きつけのバーで、たつぷりとワインの講釈をしてやる」

皆の笑いが研究室に響いた。

「さ、出ましょ」真奈美がマフラーを巻きながら、満面の笑みで皆を促した。皆も上着を着込み、連れ立って、ソロソロと研究室から廊下に出る。

最後になった河合が研究室の電気を消そうとスイッチに手を伸ばした瞬間、河合の足首をつかむものがあつた。

「…先生…」顔面血だらけの杉山が、床を這ったまま、恨めしそうに杉山を見上げていた。「…今夜は…逃すまじ…」眼鏡も粉々に砕けている。「地獄の果てまでも…付き合ってもらいマス…グヒ、グヒ、ヒヒヒヒー！」両手でしっかりと河合の腿を抱きしめた。

「ヒッ…」杉山はドアにすぎるようにへたり込むと、やはり這うような形で廊下を見た。水西、大佛、真奈美の三人は、既に暗い廊下の彼方に歩み去り、笑い声のみが微かに聞こえる。「助け…」声が出ない。

「…たつぷりと…楽しませてもらうよ…」杉山の目は、もはや常人の光を湛えてはいなかった。

ヒイヒイヒイ！ クリスマス・イブの大学の冷たい廊下に、河合の悲鳴が響き渡る。

街には、まだまだ雪が降り積もる気配である。

いつの間にか点いていたラジオからは、ビーチ・ボーイズの「We Three Kings of Orient Are」が厳かに流れる…。

(後書き)

2003年2月9日(日)に完成した作品です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8034q/>

『Christmas Shuffle』

2011年2月15日22時10分発行